

倉沢浩二はその時一課長の遠山哲司に呼ばれて会議室にいた。そこには第三強行犯の真鍋信一も同席していたのだが、いつもの愛嬌あふれる笑顔からは程遠い苦虫を噛み潰したような顔を呈し、自分がこの件にどう関与するのか知ったこつちやないといった態度を隠しもしなかった。実際、遠山が二人の主任を捉まえて話したことは現行の捜査内容とは程遠いもので、事件が山場を迎えているときに人事の話をする上司の神経など理解を超えているというのが倉沢にとつても本音だった。

前田刑事部長の退職に伴い、遠山は警視長として刑事部長に昇進、ついでには倉沢を自分の後釜へ収め、特殊犯管理官の席へは真鍋を回すという話だった。

倉沢と真鍋は世田谷に捜査本部の立っていた連続誘拐殺人事件にかかり切りで、一課強行犯と特殊犯の威信に関わる重大な捜査展開の真つ只中にいた。三人目の犠牲者を経て残っていた体液と毛根からようやく犯人断定へ漕ぎ付け、広域重要指定指名手配、公開捜査に乗り出したのが一昨日未明のことだった。

「遠山、俺たちは今捜査から外れるわけにはいかない。それはあんたが一番良く知っているはずだ」  
真鍋は不快感も露わに昔の同僚の顔前へ言った。

遠山はわずかに片方の眉を上げて、こちらと同じように渋面を作って言った。

「俺だって今この時に好きでこんな話をしているんじゃない。なぜかは知らんが上からの異常な催促なんだ。手回しが早くて俺も戸惑っている」

「前田は退職理由を言わんのか」

「言わん。恐らく一生言わないだろう」

「このヤマのけりをつけるまで待ってくれ」倉沢が遠山を見て言った。

「今四係から真鍋を取ったら、主任の木村と佐伯しか残らない。あいつらはまだ若すぎる。それは俺の班でも同じことが言える。朝倉と二階堂がいるが、彼らは今、最前線で奔走している。指令を的確に出す人間が要る」

遠山が倉沢を一瞬見つめ、ふと表情を和らげた。

「お前は昔から変わらん」

男達は同時に、照れくさいような、互いを皮肉るような苦笑いを繰り返した。

午前中早くに駆け出していった部下たちの無事の帰還を待つ間、午後二十一時を過ぎた幹部たちの隠微な会議はそうして終わった。

六階の大部屋へ戻ると、一日中見えない犯人を追って駆けずり回った捜査員たちが興奮で殺気立った目を異様に光らせ、漬物石のように重くなった脚を引きずりながら続々と戻ってくるのに出会った。広域指定になった時点で本部を世田谷署から本庁へ移し、午後二十二時に開かれるもう何度目かも判らない捜査会議に備えるために、ある者は手帳を繰り返すおし、ある者は食堂の自動販売機を指し、そして大半は自分の机に突っ伏して僅かな睡眠を貪ろうとするのだった。一様に憔悴しきった顔の部下たちはもう口を開くのも億劫と言う表情を隠さず、倉沢を見ても皆無言で軽く頭を振るだけだった。

捜査が大詰めになると毎回一課長から滋養強壮剤の差し入れがあるのだが、大きなダンボールに疲れきった手をつつこんでドリンク剤を取っていく中に、一際長く繊細な指を見た。二階堂龍介だった。

特殊犯機動捜査自動二輪部隊のこの男は、普段なら捜査が山場を迎えても飄々として、一人だけ浮世離れたような顔を曇らせもせずにいるのだが、今回の事件では最初から出ずっぱりでろくに家にも戻っておらず、目元にはうつすらと隈を浮かべ、清涼な横顔はなお一層研ぎ澄まされて、純度の高いダイヤのような透明感を放っていた。

二階堂は上司を眼前に認めると、ふと我が家へ辿り着いたような微笑を見せて言った。

「ドリンク剤よりも、トマトジュースといった気分です」

倉沢もつい微笑が漏れた。「買って来る。待ってる」と席を立った。

大部屋を出た廊下で、エレベーターから朝倉誠吾が出てくるのに出会った。

こちらと同じように心身ともに困憊しきった様相だった。倉沢が近づくと暗く美しい双眸にある種凄艶な光を点し、無造作に倉沢の手を取ったと思うと「トマトジュース買うなら俺にも一本」と言つて五百円玉を押し付けてきた。

この二人の部下たちは相変わらずだった。

一日中顔を合わせなくても、すれ違いさえしなくても、考えること、望むことは常に一緒なのだった。倉沢はそれを目の当たりにするたびに何とも言えない不思議な気分になせられ、この二人の間に流れる空気は一体何なのだと考え始めるのだが、結局いつも思考は途中で止まり、自分には所詮理解できない次元なのだと諦めるのが常だった。

机に脚を上げ、寄せた椅子の上で互いに肩を押し付ける形で、自分の買ってきたトマトジュースの缶を手放ししている部下二人を見ると、管理官の自分は何だか双子の父親のような気分になったものだった。数ヶ月前、突如沸き起こった激情を抑えることが出来ずに車の中で誠吾を抱擁した記憶はまだ新しく、艶やかなその顔を見るたびに心の底が疼くのを禁じ得なかつたが、そうした欲望とはまた別に、自分の目には見えない何かで繋がる誠吾と二階堂に嫉妬する気持ちが次第に薄くなつていくのも、また事実だった。

見ているとやがて二階堂が目を閉じ、誠吾はそれをちらりと肩越しに見遣ると、そのまま視線を倉沢へ移した。そうして二人は約十メートルの距離を経て一瞬見つめあい、誠吾はふと微笑して目を閉じた。

わずか二十分で散会となつた捜査会議のあと、倉沢は真鍋を誘つて一杯やりに出かけた。真鍋のほうもその晩はそういう気分だつたらしく、本庁を出たところで自分を呼ぶ倉沢を振り返つた途端、片手を上げてコップを傾けるしぐさをしたのだつた。背が高く瘦身の倉沢と並ぶと真鍋の押し縮めたような体型は余計に目立つたが、当の本人はそんなことはまるで気にしていない様子で、かつての強行犯の同僚と夜の街へ繰り出すのを素直に喜んでといった顔つきだった。

捜査で煮詰まつた頭を冷やすために二人は新橋までの道のりを歩くことにした。互いの家族のこと、世間のこと、共通の上司の悪口など、国家公務員と言えどサラリーマンが寄つてたかれば話すことは皆同じで、昔から気の合う二人は互い

に心の底から笑顔になるのがわかった。

真鍋と倉沢は若かりし頃、本庁配属になる前に渋谷署の指定重点犯罪担当で四年間共に足を棒にした仲だった。神経質で細かい倉沢と明るくて大雑把な真鍋のコンビは体型のみならずいつも揶揄的となったが、本人たちは至って気にせず、警察組織の酸いも甘いも一緒に乗り越えてきた。

管内で発生した強盗殺人犯スピード検挙で二人いっぺんに特別功労賞を貰い、そのまま本庁捜査一課強行犯へ吸い上げられてからも地道に仕事をこなし、上へのゴマスリも忘れず、それぞれ四係の係長と特殊犯管理官へと収まったのだった。

「最近、ふっきれたみたいじゃねえか」

真鍋はハイボールを片手にそんなことを倉沢に言った。

零時を過ぎても場末の居酒屋は一層の賑わいを見せ、奥の二人用の席へ落ち着いた男二人は、話をするにも少し声を大きくしなければならなかった。

倉沢は何のことだかわからないといった顔をして「ふっきれた？」と訊いた。

「二人の綺麗な坊っちゃんたち」そう言つてのけ、真鍋はハイボールを煽った。

こいつは昔からハイボール専門だった、と倉沢は思った。

「何ヶ月か前、あのうちのどつちかと、何かあつたら」

「相変わらずだなお前」倉沢は苦笑した。

「何もないけどな」

「惚れたか」真鍋の目が笑っている。酔っている様子はない。心配なのだ。

「そんなわけないだろう」倉沢は笑った。「惚れるとか、惚れないの問題かよ」

「問題だよ」真鍋はつぶらな瞳で不器用にウインクして見せた。目にゴミが入ったのと大差なかった。

「俺にもかつてそういうときがあつたからな」

「え？」

「いや、お前の部下にじゃねえよ」そういつて笑いながら真鍋は人差し指を横に振った。

「渋谷区の連中が登山パーティー組んで、山で殺し合いしたのを覚えてるか？ 俺が一人で山梨に借り出された時だ。もうふた昔以上も前の話よ」

四係に配属になる前の真鍋はかつて、渋谷署での地どりで鍛えられた小柄だが精悍な体つきをしており、くりくりした目で愛嬌のある人懐っこい笑顔が印象的な男だった。登山経験のある捜査員はそのころの渋谷署には真鍋しかおらず、真冬の厳しい寒さの中、ゴアテックスで防備し、目出し帽の上にさらに毛糸の帽子を被った滑稽な姿の真鍋を新宿駅から見送った記憶が、倉沢の脳裏にうつすらと蘇った。

「合同捜査本部は県警に立っていて俺はそこに一週間世話になったんだが、山岳警備隊に年上のとびきり綺麗なのがひとりいてな。南甲府署の誰かだと聞いたが、結局名前も知らないままだった。違う捜査に借り出されたのか、最初の三日間だけで、それっきりそいつとは会わなかった。はじめはまさかこの俺に限り男に惚れるなんてことがあつてたまるかと思つてたんだよ。だけど、なんていうのかな」

そこで真鍋の表情が柔らくなつた。

「そういうのを超越してるのよ。実際その場に立つてしまうと、そんなことどうでもよくなるんだ。人間あんまり美しいと、性別を超えてしまうものなんだろうな」

そんなことを言い、ハイボールをまた一口飲んで豪快に笑うのだった。

「今頃どうしてるのかなと思うよ。雪の似合う、長い指をした、穏やかな男だったよ」

倉沢は一瞬、誠吾と二階堂が山梨出身であることを思い出していた。

すると真鍋も同じことを考えたのか、共犯のような微笑を寄こした。笑うと両方の目じりに細かいしわが寄り、その形が顔全体に柔和な印象を与え、倉沢は「こいつは幸せに年を取って行っているのだな」と改めて思った。

「お前の部下の、背の一センチ高い方によく似てる。もちろん本人に訊けやしねえけどな。お前の父ちゃんは警察官か、あのときどこで働いてた、なんてな」

真鍋の告白を聞き、倉沢は自然に笑みが漏れた。

この同僚が、雪深い山梨の山麓で心を奪われたという男を、倉沢はなんとなく眼前に思い浮かべることが出来た。

深い雪の中を進むたびに、その背中が僅かに上下する。

肩に覆いかぶさる雪を払う右手の指が、長く繊細に舞うのだ。

同時に、自分は真鍋に特殊犯を委ねることに依存はないと唐突に思った。

そして自分もそこを離れ、一課長に就任することに。

また違う視点から、二人の不思議な部下たちを見守ることが出来る。

そうだ。見守るのだ。

そう思った途端、胸に開放感が宿った。これでいいんだ、と倉沢は思った。

玄関のドアを開けようにも、すべてのエネルギーを放出し抜け殻になっている状態では鍵穴すら見つけられず、鍵すらもどこにしまったのか覚えておらず、俺は全権を放棄し後ろの龍介を振り返った。「……鍵持ってる？」

龍介も何だか微妙に横揺れしており、不思議な色合いの瞳がマンシヨンの廊下の蛍光灯を反射していた。

「……鍵……うん」そう言っただけのろろとポケットというポケットを触って、財布を探し出し中から鍵を取り出したが、そこで動きはハタと止まって、「鍵穴が見えない」と、俺と同じことを言った。

俺はそれを奪ってドアノブに僅かに残った全神経を集中した。酔っ払いになった気分だった。血管が切れそうになり、倒れると思ったとき、ようやく鍵穴を探し当てて鍵を差し込むのに成功した。

右に四回まわす。ドアが開いた。俺たちはどつと中へなだれ込んだ。

五日寝ていない俺と龍介がまずしたことは、律儀に締めていたネクタイを首から引っ剥がしソファの彼方へ放り投げたことだった。それから上着を脱いでそれも放り、ワイシャツの上から三番目までのボタンを引きちぎる勢いではずした。

そこでようやく人間らしい気分が訪れた。久しぶりの帰宅だった。

俺と龍介はソファになだれ込み、互いの頭をくつつけあう形でしばらく安心してはいたが、それでも脳みその真ん中あたりではまだ見ぬ逃亡犯を必死で追いかけており、そのうち二時間もすれば習性で、血が滾ってきて目がぎらぎらと冴えわたるのだった。その前に何としても眠らなければならぬ。明日もまた長いのだ。

横にいる龍介に「今日何か食った？」と訊くと、しばらくしてから「トマトジュース」という一言が返ってきたので「俺もだ」と返事をした。そうしてまた五秒くらいおいて、「先週の肉じゃが冷凍してある？」と訊いてきたので「ある。温めようか」と言うと、「うん。何か食わないと死ぬ」と物騒な声が降ってきた。

最後の気力を振り絞って俺は台所へ立った。冷凍庫の扉はこんなに重かったかというくらいで、渾身の力で引っぱり、やつのことで取り出した肉じゃがの鍋を弱火にかけた。龍介はふらふらと風呂場のほうへ行き、しばらくして風呂桶に湯を溜める音が聞こえてきたが、なかなか戻ってこない様子を見に行くと、風呂桶の淵にへたりこんだまま眠りこけそうな勢いだった。まるで遭難者だ。俺はちよつと笑った。

「龍介、起きろ。食ってから寝ろ」

横に座って髪に触れた。やわらかな感触が指に心地よかった。

「寝るな。寝たら死ぬぞ」

「遭難しかけた」と、龍介がふわりと笑った。両腕を伸ばして俺の首にかける。

俺はその脇を持って龍介を抱えた。「さあ、食って、風呂入って寝よう」

捜査が大詰めにになると、俺たちはいつもこうなるのだった。特殊犯捜査係は人質たてこもりや誘拐、企業恐喝を専門とするので、他の事件の場合は遊軍的に一課内のあらゆる捜査に借り出されるのだが、今回は誘拐殺人だから最初から出さずっぱりだった。俺は覆面で倉沢と組んだり、他の特殊犯のやつと一緒に行動しているが、龍介は機動捜査隊員であるため常に二輪で待機、一昨日未明に公開捜査に踏み切った段階で、地に足をつけているよりバイクに乗っている時間の方が長いという有様だった。

捜査一課第三強行犯四係と世田谷署との合同捜査で、捜査期間は既にひと月を優に超えていた。これだけ不眠不休が続くと課内の全員の士気が落ち、広域指定が出てやっと精神がぎらついてきたといった具合だった。脳みそに異常な興奮が宿り、かといって体力がそれに追いつかず、皆一様に狂ったような、欲情したような目つきで徘徊するようになる。その状態は非常に危険で、同じ志を持つ捜査員の間でも一触即発なのだった。

もともと平和主義の龍介は俺と違い、どんなにきつい捜査状況でも自分のペースを保っていられるのだが、今回に限り人が変わっているという点では俺と同じだった。長い明日に備え適当に温めた肉じゃがにかぶりつく俺たち刑事野郎はこの時刻、代々木のちよつとした潇洒なマンションの一室で、唯一の雄どもに違いなかった。

こんな時いつも思うのは、山梨県警で働く父親のことだった。

親父もかつてこうして、追い続けた獲物をついに捕獲するという興奮を、龍介の父親と一緒に味わったのだろうか。常にチームを組んで行動を共にし、苦楽を分かち合った二人の間に、今俺と龍介が感じているような絆が存在したのだろうか。

暗い瞳で「失うな」と言ったのは、自分が「失ってしまったから」なのか。

そう考えると、目の前にいる龍介を急に抱きしめたくなくなった。

肉じゃがで腹を満たし、少しは人生に納得したような顔をしている龍介は、そんな俺を見てまた笑うのだった。

「こんな状況で、よくいろんなことが考えられるよね」

「俺の考えていることは、どうせ龍介にはお見通しなんだろう」

「なんとなくわかるよ」

「親父たちのことを考えてた」

「俺も」と、龍介は言った。

「俺の父はきつと、今俺が誠吾に対して思っている気持ちを、おとうさんに抱いていたんだと思う」

龍介は俺の父を「おとうさん」と呼ぶ。



「最近、死に顔をよく思い出す。あれは幸せな記憶を持ったまま逝った顔だった」  
こんな話をするのは、お互いに神経が高ぶっている証拠だと思った。すると龍介は「疲れてるんだね俺たち」と言い、  
やわらかく微笑んだ。

これは高校からずっとだった。

互いの気持ちを感じ、考えることがほぼ同じなのだ。

親父もよく言っていた。「修哉とは、考えることが似ている」と。

心がひそかにざわついた。同じ運命を辿るのではないかと一瞬想像した。

「失いたくない」という脳裏の悲鳴は、それなのか。

胸郭に叫び声が響く。早くこの手で掴んで、絶対に離してはならないという焦燥。夢に見た地平線が、暗闇に覆われる  
前に。世界がまぶたを閉じてしまう前に。

龍介が俺を見つめている。澄み渡る瞳には、俺が映っている。

俺だけが。

「誠吾」と俺を呼んだ。「今日は、もう考えないで寝よう」

同じことを考えているのだ。

俺は龍介の後ろに立ち、その肩に両腕を回して首筋に頬を寄せた。

「先に風呂に入れ。布団敷いておくよ」

うん、と龍介は言い、両手で俺の腕を抱いたまま、首をがっくりうなだれた。

電池切れだった。

順番に風呂に入った。途中で眠ってないか、互いに監視した。

髪を乾かすのも面倒で寝癖がつかない程度にドライヤーを当て、目を閉じたまま子供のよう歯を磨いて三度口をすいだあと、俺たちは半ば意識不明で倒れ込んだ。

布団に潜り込むのさえ億劫だった。

俺は仰向けにひっくりかえり、龍介はうつぶせで撃沈した。

俺の身体に回した龍介の腕は、妙に熱かった。

次の日の夜九時、俺たちは東名でカーチェイスを繰り広げることとなった。

目撃情報を元に手配の出でいたトヨタの白いハイエースが、厚木インターチェンジの検問を止まらずに突破したという通報を受けての出動だった。

久々のビーコンとサイレン全開で、倉沢を助手席に乗せて俺は高速をぶっ飛ばしていた。先導する龍介はすでに彼方先で、俺たちを追尾するパトカーが五台、捜査員全員の気迫を背負っていた。清水の分岐点が見えてきたあたりでハイエースに追いついた。龍介はそれを追い越し、先回りして煽っていた。龍介の身体がバイクと一体となって左へ激しく傾いたかと思うと視界から消え、眼前に迫ったハイエースはコントロールを失い右の中央分離帯へ向かっていった。俺はハンドルの思い切り左へ切って激突を避け、急ブレーキをかけ車体を軋ませて停車した。

俺と倉沢は拳銃を手にドアを蹴って、分離帯に乗り上げたハイエースに向かって走り出した。左に寄せてバイクを放り出すように停めた龍介が駆け寄ってくるのを見た。胸のホルダーからバークテックを抜いた。俺たちの後ろで次々に停車したパトカーから、機動捜査隊員たちが一気になだれ込んできた。皆腰を低くし、銃口を一齐にハイエースへ向けた。

俺は銃を固定したままハイエースに近づいた。

運転席では、背を丸めた男がハンドルに両手でしがみついて泣いていた。

ドアを開け放つてそいつを引きずり出し、後ろ手に押さえつけた。

「狭山道雄。世田谷区連続誘拐殺人容疑で、貴方を逮捕します」

倉沢が手錠をその手首に咬ませる音が響いた。

後ろで怒号と拍手が沸き起こった。見回すと、捜査員たちの他に、無数の野次馬が自分たちの車をそこらへ放り出して集っていた。

龍介が近づいてきて、俺の腕を軽く取った。「反対車線もだよ」

その言葉に首を巡らすと、色とりどりの乗用車が所狭しと無規律にひしめき合い、ドライバーたちが身を乗り出して手を叩いている。

機動隊の連中が「あーあ。結局交通整理かよ」とぶつくさ言い、他の捜査員たちが笑った。飛び交うパトカーの無線では、よくやっただの、偉いだのと大騒ぎする声が漏れ聞こえ、そんな中龍介はC Bへ戻ってエンジンをかけた。車体をちよつとチェックしたあと、首を僅かに傾けて「おいで」と微笑む。

俺は近くにいた四係の男に「本庁で待ってる」と伝え、そいつが「えっ」という顔をする前に踵を返した。グリッププセーフティーをもとに戻して銃をホルダーへ収めた。倉沢と目があつた。上司はアメリカ映画のように、親指を立てて頷いた。笑顔だった。

俺も同じようにして、「本庁で」と口パクし、足早に龍介に近づいた。

ヘルメットを渡す龍介に「一八〇キロ出たぞ」と言うと、「夕べ良く寝たからね」と言い、「誠吾もすごかったよ」と笑った。追尾の時の形相を言っているのだ。

俺が「視界から消えた時は焦った」と言うと「ああでもないないと、あのままずっと追われてたからね」と事もなげに言うのけ、「ガスなくなりそうだったから、早めに済ませたかった」と片目をつぶった。

龍介の爽快感に溢れた顔を見たのは久しぶりだった。美しい笑顔がこぼれ咲いていた。

そんな俺をまた見透かすように「カッコよかったよ」と言い、自分はさっさとヘルメットをしてアクセルを吹かした。

「乗って。置いてっちゃうよ」

俺もヘルメットをして、慌てて龍介の後ろへ乗った。

後ろから、どこから湧いてきたのか七社会の連中が大勢で追いかけてきた。

フラッシュがたかれるのを見て俺たちを撮っても仕方ないだろうと一瞬思ったが、龍介の背中を感じながら次第に風となるにつれ、そんなことはもうどうでもよくなって行った。